

『山—駆り立てられるもの』

サンナビキ同人 和田 城志

私の登山の軌跡を話せとお話がありました。雑誌で二年半ほど連載をして、だいたい言いたいことは言い尽くしました。私の登山はちょっと窮屈で偏屈です。しかし、その精神は自分で言うのもおかしいですが、しごく正統であたりまえの考えに基づいています。第一、山登りにいろいろな考えなどありません。簡単明瞭に「より高く、より困難な、より遠い」山に登ることです。かつて、そういう山は結果的に「より未知」であり、未踏峰に象徴されてきました。

もう一つ、山登りの魅力についてもっと大切なことがあります。山に登ることそれだけで楽しいということですが、これは意味とか価値とかを持ち出す以前のプリミチブな喜びですから、あえて問うことはないように思いますが、実はこれが一番理解し難い人間の衝動です。馬鹿と煙は高いところへのぼる、『駆り立てられるもの』とはそのことを指しているのです。

前者を、異論があるかもしれませんが、山登りにけるパイオニア・ワークであるとし、後者をアルピニズムとし、これからの話はこの二つの考えを行き来します。これに当てはまらない山登りは、物見遊山であり、調査活動であり、健康促進運動であります。その楽しみは理解できますが、『駆り立てられるもの』というのには少し役不足です。私の話に違和感を思ったら、多分それらの観点に立っているときです。私の話は、アルピニズムとパイオニア・ワークについての山登りの特化した世界の話です。

文科省、登山研修所発行の『登山研修』VOL.9—1994 の中で「登山における困難とは何か」という小文を書きました。ほぼ私の登山観が言い尽くされています。一言で言えば、下記のようになります。

「アルピニズムの真髄—より困難を目指して—とは、高さ—不快な低酸素に耐え、遠さ—不便な生活をいとわず、岩壁—不安な日々を過ごしながら、時季—不利な季節を選んで、結果—不満の中で遭難死する行為であると言える。アルピニストとは不を好む不可解な奇人ということになろうか」

私の登山の軌跡は、大学山岳部入部から始まるといっているでしょう。そこで出合った「京大山岳部報告8、9号」には強い影響を受けました。登山の方向性はそこで決まったようです。その象徴的な対象が「剣沢の大滝」で、それをきっかけに冬の剣岳と雪黒部に通いはじめました。1970年より1999年まで、約30年間を費やしました。偉大な登山記録をたくさん知り、また先人たちが登り残したところを丁寧にたどりました。重箱の隅とは言いながら、少しでも手垢のついていない山、それが計画の出発点でした。剣岳の豪雪や雪黒部横断の重厚な登山は、私に日本の自然のすばらしさを気づかせてくれました。この狭い北陸の山域に何度も通いましたが、行くたびに新たな感動に包まれ、飽きるということがありませんでした。

冬剣、雪黒部で知った山登りの醍醐味は私の人生の宝物です。大それたことは望みません。ただ雪に埋もれてもがいているというような、シンプルなときがこの上もなく恋しいのです。そういう意味では、上昇志向とか社会的価値とかとは無縁です。山登りの意味づけを雑誌で書き連ねてきましたが、私の実感は正反対で、理由も説明もいらない山、「好きだから、居心地がいいから」登るだけなのです。

それとは別に、ヒマラヤにもあこがれました。これは黒部とはちょっとちがう魅力がありました。私の中に野望が生まれたのです。その代表的な山、ナンガ・パルバットはもう一つの宝物です。1978年、私はカラコルム、ゲントⅡ(7343m)とネパール、ランタンリルン(7246m)の二つの山を初登頂しましたが、その同じときにラインホルト・メッスナーはナンガ・パルバット、ディアミール壁を単独初登攀し、エベレストを無酸素登頂しました。山と彼の登り方に圧倒されました。

自分の能力をフル動員してやっと登った私の山が貧相に思えました。これは大切な気分です。これだけ歴然とした力の差を見せ付けられると、私の中に育ちつつあったアルピニズムもパイオニア・ワークも、子供の遊びに思えたのです。山登りはコロンブスの卵ではありません。アイデアも実際の行動も追隨を許さない驚きや激しさがなければ、自己満足できないのです。

私は二番煎じを恐れませんが、偉大な探検家、登山家に帰依したとっていいでしょう。オリジナリティを捨てたと言ってもいいかも知れません。とにかく、まねる、近づく、寄り添う、それが私の方法でした。日本の登山家、世界のアルピニスト、すべてが先生でした。

加藤文太郎、ヘルマン・ブール、ハロルド・ティルマン、ボナッティ、メッスナー、しかし、近づけなかったのです。もっと身近にいた同時代の登山家たちに対しても同じ思いを抱いています。昨今活躍している若手のヒマラヤン・クライマーにも圧倒されています。正直に言って、植村直巳を例外として、かつての大学山岳部出身者に優れた登山家は育っていません。何故でしょう。日本がアルピニズムの後進国であったことは当然ですが、どこかでボタンを掛け違えたのか、それとも自然観の違いなのか、いまだに分かりません。

私の登山の軌跡を紹介しながら、後悔じみた愚痴を述べたいと思います。

- 1、山登り開眼とロッククライミング
- 2、劔沢初遡行1976年
- 3、ヒマラヤ初登頂1978年
- 4、積雪期黒部横断と劔岳北方稜線1980年代
- 5、積雪期劔沢大滝第二登からハツ峰Ⅰ峰滝ノ稜初登1983年
- 6、カンチェンジュンガ縦走とナンガ・パールバット1984年
- 7、マッシャーブルム北西壁初登とブロード・ピーク、アルパインスタイル1985年
- 8、ナンガ・パールバット、ルパール・フランケ中央側稜1986年
- 9、遭難、立山とキンヤン・キッシュ1987年
- 10、再び雪黒部、冬劔へ、
- 11、ナンガ・パールバットバツイン柱状岩稜1991年
- 12、黒部別山トサカ尾根よりハツ峰Ⅴ峰菱ノ稜初登1993年

これから何をするのか、できるのか、山登りで感じた激しい感動を超えるものに出会えるのか、分からないのですが、とにかく登り続ける中で模索することしかないように思います。私のすべての能力は下り坂であることが自覚しています。その分だけ対象は相対的に大きくなっています。今、もしナンガ・パールバットに登ることができれば、かつて以上の感動が湧くであろうことを疑いません。能力相応に登るなどということはしたくありません。いままでも、これからもです。右膝十字じん帯がないことは私に新たな夢を見させてくれているとも言えるのです。

山登りがなぜこれほど面白いのか、人をなぜ駆り立てるのか。「より高く、より困難で、より遠い」世界を目指す、痴的欲求の肉体的解放が答なのかもしれない。狂えということでしょう。

—了—

添付資料； 和田城志「登山における困難とは何か」

文部科学省国立登山研修所発行『登山研修』Vol.9－1994、p7～13